

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻 裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)

電話 (03) 3503-3829

FAX (03) 3503-3828

<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.37 No.1
2013.1.1
(通巻 217 号)

日本新聞製作技術懇話会
会 報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

年頭のご挨拶	日本新聞製作技術懇話会 会長	芝 則之	3
	日本新聞協会技術委員会 委員長	五阿弥宏安	4
新聞協会賞を受賞して「競争と協調の時代へ～カラーブルーフの相互利用～」	朝日新聞社 製作本部システムセクションサブマネジャー	町田 温	5
	中日新聞社名古屋本社 技術局印刷技術部部長	佐藤 博之	5
新機軸で盛り上がったJANPS	JANPS準備部会 部会長	矢森 仁	7
上流工程見学記	朝日新聞東京本社 製作本部システムセクションマネジャー	矢崎 朋夫	9
製版工程見学記	産経新聞東京本社 制作局技術部長	松浦 康成	10
下流工程見学記	日本経済新聞社 制作局技術部長	中込 慎一	11
第3回CONPT-TOUR合同再会パーティーを開催	日本新聞製作技術懇話会 クラブ委員会委員長	村松 哲	12
JANPS会場内セミナーを開催	日本新聞製作技術懇話会 クラブ委員会副委員長	平井 泰之	13
会員社リポート	東洋電機(株)、西研グラフィックス(株)		14
	(株)インテック、ニッカ(株)		15
楽事万歳	静岡新聞社 印刷局長	増田 晴樹	16
	パナソニックSSインフラシステム(株) メディアグループグループマネージャー	永瀬 高幸	17
IFRA STUDY TOUR歓迎夕食会			18
第38回年末全体会議開く			18
CONPT日誌他			19
会員名簿			20

●表紙写真提供：富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(株)・富士山

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター

年頭のご挨拶

JANPS2012 成功をバネに跳躍

日本新聞製作技術懇話会 会長 芝 則之



謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年はJANPSで明け暮れた感があります。3年の準備期間を経て11月27日に開幕、期間こそ3日間と1日短縮になりましたが、お陰様で成功のうちに終えることが出来ました。入場者数も1万2,589人と、前回4日間開催の1万5,533人を按分比較しますと900人強上回り、まずは安堵した次第です。JANPSを通じ、製作関連業界が日頃培った新技術・設備機器・システム・資材・ノウハウを新聞社の皆様にお見せできたことは喜びにたえません。一方新聞界も朝日、毎日、読売、日経、産経の5社がそろって出展され、それぞれのブースが賑わいました。次回開催に波及効果がありそうだと期待しています。

昨年末の総選挙を経て新政権が発足し、各分野の閉塞状況をブレイクスルーしてくれるのではないかと少なからぬ期待もありますが、政治に寄りかかる経営などもとよりありません。懇話会の理念である、会員各社が切磋琢磨しつつ新聞社と一体となって新聞界の発展に努める行動があるのみです。

現実はお厳しいのも事実です。全国の新聞の発行部数の減少には歯止めがかからず、2012年は4,777万部になりました。前年比およそ56万部の落ち込みです。電子メディアへの浸透は未だしで、昨年秋青森で開かれた新聞大会に出席した際も、地方紙の多くは電子新聞への本格展開に慎重な考えを述べていま

した。紙の新聞がまだまだ頑張っていかなければならないと痛感しました。懇話会会員メーカー・サプライヤーの役割は大きいと言わざるを得ません。来年4月に予定される消費税8%への引き上げも大きな問題です。新聞社は一丸となって新聞に軽減税率適用を求めています。その行方は分かりませんが、消費税増税が低迷する設備投資を呼び起こすきっかけになればとの期待もあります。

喫緊の課題は、製作工程の一層のコストカット、想定される中部・南海大地震、首都直下地震に備える製作システムの防災対策です。印刷・輸送の協業化への対応、地球環境への配慮も含め、新聞製作技術業界がどう新聞社の要請に応えることができるか、JANPS2012を終えた今年の命題であります。これらを解決することが、製作技術業界が逆境から脱出することに繋がっていると思います。2012JANPSの成果をバネに、今年は久方ぶりジャンプの年としたいものです。

drupa視察、JANPS開催、World Publishing Expo視察と大イベント目白押しだった昨年と変わって、今年の年間行事は落ち着いたものになります。1月11日(金)の新年合同名刺交換会からスタートしますが、閉塞感を吹き飛ばすような新年会にしたいと願っています。次回JANPSをいつ開くか、結論を出すのも重要です。今回のデータを分析しつつ決断をしなければなりません。JANPS開催年で一部割愛した春秋の国内研修会、技術懇談会も例年にもどります。今年も皆様の変わりぬご理解、ご支援をお願い申し上げます。

技術力が支える新聞の未来

日本新聞協会技術委員会 委員長 五阿弥 宏安



新しい年が明けました。巳年の「巳」には「植物に種子ができ始める時期」という意味があるそうです。前回の巳年は2001年。米国の9・11テロは冷戦終結後の世界秩序の

枠組みを大きく揺さぶりました。その前の1989年は昭和が終わり、平成に変わった年です。どうやら巳年は大波乱の年でもありそうです。

そして今年。政治も経済も先行きは極めて不透明なままです。予測困難な時代にあって確実に言えることがあります。それは情報の加速度的増大が今後も続くということです。

* * *

専門家によると、情報の備蓄量は世界経済の成長率の4倍、コンピューターの演算能力は9倍の速さで増えているそうです。まさに世界にはジャンクなものも含めて情報が溢れかえっています。問題は、情報量が幾何級数的に増え続けるのに対し、情報を受け取る人間の能力は算術級数的にしか伸びないことです。情報収集に使える時間にも限界があります。ギャップはますます広がるばかりです。一昔前は情報不足が悩みでしたが、今は情報過剰に振り回されています。

興味深い米国の実験結果があります。食料品店の試食コーナーに24種類のジャムと6種類のジャムを並べて売り上げを比べると、品揃えが少ない方が6倍も多かったそうです。選択肢が多いほどいいと思いがちですが、実際には人は面倒になって選択自体をやめる傾

向があるようです。人間の情報処理能力には限界があるということでしょう。

* * *

情報過多の時代だからこそ、国内外で生起する様々な出来事について迅速・的確に情報を集め、分かりやすく整理し、読者に伝える新聞の役割は一層重要になっています。新聞の危機が叫ばれて久しいですが、各種調査を見る限り、「社会の教科書」といわれる新聞の信頼はいささかも揺らいでいません。

もちろん、あらゆる分野でイノベーションが求められる中、新聞業界も例外ではありません。新聞各社はラジオやテレビ、インターネット、モバイル端末と情報の提供先を次々広げてきました。時代の変化に柔軟に対応して行くには優れた「技術力」が欠かせません。

昨年11月の「JANPS2012」にはCONPT加盟社に加え、全国紙5社と3大学の研究室も参加しました。最新技術の導入により、高品質な紙面製作が可能となります。生産工程の時間短縮や省力化など効率性も向上し、経費削減を図ることができます。「紙」と「デジタル」の融合もさらに進むことでしょう。

同時に、新聞各社の協調も従来以上に求められています。委託受託印刷や共同輸送など下流運用はもちろん、システム技術についても今後は「協調」がキーワードになりそうです。新聞業界の状況は厳しさを増していますが、CONPT加盟社、新聞社、研究機関がしっかりスクラムを組めば、きっと乗り越えられると確信しています。みんなで新聞の新たな未来を創っていきましょう。

新聞協会賞「技術部門」を受賞して

競争と協調の時代へ ～カラープルーフの相互利用～

朝日新聞社 製作本部システムセクションサブマネジャー 町田 温
中日新聞社名古屋本社 技術局印刷技術部部長 佐藤 博之



新聞業界では発行部数や広告収入が低迷するなか、技術部門では、委託受託印刷や輸送分野での業務提携が加速しており、まさに「競争と協調」が生き残りをかけた業界のキーワードとなっている。このような状況の中、朝日新聞社と中日新聞社は「カラープルーフの相互利用」を実現し、文字通り時代にマッチした取り組みとなった。以下に概要と成果をご紹介します。

* * *

カラープルーフとは、新聞を印刷する際に必要となる「色見本」を印刷現場へ提供するシステムである。すべての工場に対して全く同じ色見本を提供できるため、工場ではこれを目標として紙面を印刷することにより、広告クライアントや編集者の意図にあった紙面品質を担保できる。なお朝日新聞社、中日新聞社ともに、パソコンとディスプレイを使用したモニタープルーフと、プリンターを使用した従来の紙プルーフを併用し、特に工場にはモニタープルーフを導入している。

このカラープルーフシステムで重要な技術ポイントは以下の3つとなる。

1つめは色を管理するシステムであるカラーマネジメントシステム(以下、CMS)である。これは各新聞社が採用したメーカーが開発したソフトウェアである。

2つめは印刷特性データで、通称プロファイルと呼ばれる各新聞社の色再現の特性、味

付けを設定したデータである。前述の色管理ソフトに、各社が作成したプロファイルを組み合わせることで、各社の目指す色再現が可能となる。朝日新聞社、中日新聞社とも、ICCと呼ばれる国際標準規格のプロファイルでそれぞれの色特性を設定している。

3つめは、カラープルーフと印刷紙面を比較する工場での観察環境の整備と統一が挙げられる。カラープルーフで表現した色が正しくても、紙面を観察・比較する環境が違っていると全く異なる印刷結果となってしまうため、照度や色温度などを一定の範囲内に統一することが重要になる。

* * *

朝日新聞社と中日新聞社では提携印刷を計画し、2010年10月から朝日新聞社の川崎、座間工場と東京新聞の受託印刷を、2011年3月から中日新聞社の北陸幸工場と朝日新聞の受託印刷を開始した。

提携印刷業務を進め、他社に印刷業務を委託する場合でも、紙面の品質、特に色の再現については自社の品質基準に合わせたいという、いわゆる「こだわり」があるため、これまで委託社は受託印刷工場に自社紙面の色見本となる「カラープルーフ」の設備を導入してきた。ただ、これでは狭い工場内に委託社専用の設備を設置するスペースが必要となり、また委託社の端末操作や運用を習熟しなければならないという負担や、設備の保守管理とい



う作業も増えることになる。

このような課題を解決するため、朝日新聞社と中日新聞社では、両社のカラープルーフシステムを相互に利用して、自社のプルーフ設備だけで両社の色見本提供を実現できないか、2011年3月から検討に着手した。

両社のプルーフシステムでは、構築メーカー、ソフトウェア・ハードウェア、工場環境など、様々な点で違いがあり、相互利用を実現するためにはこれらの違いを乗り越える必要があった。

初めに取り組んだのが、ハード面の検証である。両社では使用するディスプレイの機種が異なっており、色の見え方に違いが認められた。そこでキャリブレーションソフトにより入出力特性を仮想のターゲットにあわせることで表示色の差を解消していった。さらに実際に目で確認するとともに、測色器で色パッチを測って検証を重ねていった結果、モニターの機種が違って同じ色が再現できるとの結論を得ることができた。

また最も問題となるCMSソフトウェア処理による色再現については、従来であれば、自社の色基準を作り込む手法が多様で、CMSソフトウェアや環境も統一されていないため汎用性がまったくなかった。このため自社の色再現は自社の専用端末に限られていたのが実情である。しかしカラープルーフの相互利用を考えた場合、お互いの色を両社の異なる環境で受託社側が作り込んでいたのでは真の相互利用とは言えないと考え、それぞれが共通の標準技術で色再現ができることを目指した。

結論的には色変換に使用するプロファイルはメーカーの独自技術は使わず、ICCプロファイルと呼ぶ汎用的な技術のみで完結させることを両社で申し合わせた。また、プルーフ端末周辺の照明環境を確認し、適切な観察環境になるように照明の追加や交換、間引きなどを実施した。

こうした検証や作業をひとつひとつ重ね、色の差の要因を解消していった。最終的には両社の評価機を横に並べて、実印刷紙面やサンプル画像を見比べたり、また双方の工場で実機を使用しながら広告局員を交えて色再現を確認するなどした結果、自社のプルーフ設備だけで両社の色を再現するという目標を達成することができた。

* * *

朝日新聞社と中日新聞社のカラープルーフシステムは、アーキテクチャーやシステム構造を含めて大きく異なっているが、今回の取り組みでは、この違いを乗り越えて相互利用を実現し、「工場の負担軽減」を達成した。副次的にはネットワーク費用などのランニングコストの抑制も実現することができた。

検討過程では両社のシステムに対する考え方の違いなどいわゆる「ギャップを埋める」という作業に苦心したが、結果としては「標準技術の採用と工夫」、そして「工場での色観察の環境基準作り」という、相互利用のためにカラープルーフシステムが満たすべき要件の洗い出しができたと自負している。

なお、今回の朝日新聞社、中日新聞社での取り組みは、いわば「プルーフ相互利用実現に向けた実証・実験作業」と言える。他の新聞社でも、相互利用を望んではいても「他社との調整が大変ではないか」といった懸念から躊躇するケースもあるだろうが、今回得られた作業結果だけを参考にしていただければ、他社でも短時間、低コストで実現できるものと考えている。

今後は両社で策定できた基準を広く公開することで、新聞業界としての統一基準につなげていきたいと考えている。委託受託印刷が盛んな昨今、今回の取り組みが参考となり、カラープルーフの相互利用の輪が広がるとともに、技術部門に於いては他にもシステムの共有化や共通化など様々な分野での協調が業界全体に広がっていけば幸甚である。

新機軸で盛り上がったJANPS

JANPS 準備部会 部会長 矢森 仁

日本新聞協会主催、日本新聞製作技術懇話会協賛による、第21回新聞製作技術展(JANPS2012)が11月27日(火)～11月29日(木)の3日間、東京国際展示場(東京ビッグサイト)東6ホールにて開催された。今回の統一テーマ「読む 見る つたえる 今あたらしい新聞技術」を掲げ、複数の新聞社の出展を始め、JANPS2012に向けての新たな施策として4つのテーマにチャレンジし、展示会の開催に漕ぎ着けた。今回JANPSは世界的な経済不況や震災を経て、非常に厳しい経営環境におかれた新聞業界の状況を鑑み、通例の2年に1度の開催を1年延長して3年間の準備期間をとった。この間新聞協会とタイアップしながら「JANPS準備部会」を立ち上げ、延べ11回の部会と、それ以上の事前打ち合わせ、IGAS幹部や新聞協会、新聞博物館との意見交換等を経て、4つの施策の具現化を進めた。結果は、目標に掲げた施策は4つともほぼ期待した成果を出す事が出来、準備部会としてもマニフェストを守る事が出来たのでは無いか、と安堵している。JANPSの総入場者は3日間で12,589名、内訳は、新聞関係者4,946名、商業印刷及び一般メーカー3,911名、CONPT会員及び海外関係者3,732名と、前回のJANPS2009の総入場者数15,533名には及ばなかったが、展示会開催期間が前回の4日間より3日間に短縮された事を加味すると、ほぼ同レベルの入場者が確保でき、一日当りの平均入場者数としては前回を300人強上回った結果となった。

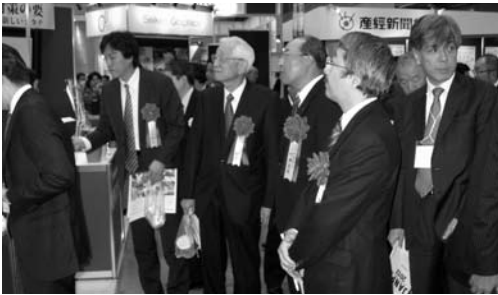
人数内訳では複数新聞社の出展により、新聞社関係者が増えたのが今回の特徴と言えよう。

大会初日のオープニングでは、新聞社各社と懇話会会員社の幹部が出席すると共に、今

回のJANPS期間に合わせて募集した「IFRA-STUDYツアー」の8人のメンバーがWAN-IFRA CEO代理のWerfel氏とイベント担当部長のOliveira氏を含めて参列し、午前10時に開会式開催となった。日本新聞協会編集制作部長佐塚正樹氏の司会のもと、主催者を代表して日本新聞協会副会長 村田正敏氏(北海道新聞社)がご挨拶され、「今回3年振りとなるJANPSは、情報系から印刷系に至るまで、新聞製作に係わる最先端の技術を一堂に集めた新聞界最大のイベントの一つである」「今回過去最大の60の社・団体に出席戴いた皆様のご協力感謝する」「新聞業界の厳しい環境の中、各社は紙面品質の一層の向上や、効率的システム構築など様々な取り組みを進められ、新聞製作における各社間の協力体制も拡がりを見せている。最新の技術をこの会場でご覧戴き、変革に積極的に取り組む新聞製作の現状を実感戴きたい」との力強いご挨拶をされた。続いて日本新聞製作技術懇話会の芝則之会長より、「前回開催より3年間の準備期間を開けた。この間技術の研鑽、新製品の開発に努力してきた。この成果をじっく



テープカットする右から日本新聞協会五阿弥技術委員長、村田副会長、新聞懇話会芝会長



り見ていただきたい」と述べられ、最近新聞製作のデジタル化も進み、今回の展示でもデジタル化が見られる。電子新聞、電子版やデジタル印刷等の台頭で、今後紙媒体と電子媒体が併存する新たな局面を示唆し、これら新たな時代に入ってきた新聞製作技術をご覧いただきたいとアピールした。

この後、村田新聞協会副会長、五阿弥日本新聞協会技術委員会委員長(読売新聞東京本社)、芝懇話会会長の3人によるテープカットで幕を開けた。開幕後の内覧会では村田副会長、五阿弥実行委員長、山根実行副委員長が佐塚編集制作部長、芝懇話会会長の案内で会場内の各出展を視察した。一方でIFRA-STUDYツアーメンバーはセミナーブースに於いて、矢森JANPS準備部会部会長の出展内容ガイダンスを受けた後会場視察を行った。今回の新たな4つの施策については、まず朝日、毎日、読売、産経、日経の新聞社5社が自社ブースを設置して各々の独自技術を出展PRしたが、入り口を入って直ぐに設けられた「新聞社通り」で、新聞社幹部や社員が多数来訪し大いに盛り上がった。続く最先端技術コーナー」では6つの大学研究室・研究機関が出展し、出展メーカーや新聞社ユーザーに研究成果を披露した。又、展示会場内に設置したCONPTセミナー会場では、CONPTセミナーとして(株)朝日プリンテックの「INCQC～世界への挑戦」、朝日新聞社・中日新聞社の「新聞協会賞・技術部門を受賞して」(競争と強調の時代へ～カラブルーフ相互利用」、本年のCONPTツアー報告として

「World Publishing Expo報告」の3講座を開催し、聴衆は170名に上った。その他出展社セミナーは19社・22講座を運営し、聴衆合計者数は600人を超えた結果となった。これに前述のIFRA誘致を含めた4つの施策は各々が成果を収めた。

恒例の、JANPS懇親会も大会初日に行い、新聞社関係者49社65名、懇話会関係者110名が参加し、合計175名と盛大な懇親会となり、五阿弥JANPS実行委員長と芝運営委員長のご挨拶の後 山根実行副委員長の乾杯で始まり新聞関係者の親交を深めた。会場でJANPS展示賞の発表と授与式も執り行われ、本年の受賞社「(株)東京機械製作所、サカタインクス(株)、富士通(株)、日本電気(株)、東芝ソリューション(株)」の5社が選ばれ、五阿弥実行委員長よりトロフィーが手渡された。翌日のCONPT-TOUR合同再会パーティーも恒例となり、新聞社関係者57名並びに懇話会関係者119名、合計176名が参集し、ツアー参加の老若男女諸氏が集い、昔話に花が咲いた。以上の通り新たな施策を織り込んだJANPS2012は前回と較べ多方面への拡がりを持ち、華やいだ雰囲気の中で成功裏に無事終了した。これも今回の長期に亘る準備期間を踏まえて、日本新聞協会、そして協会に所属される新聞社各社、新聞懇話会の所属メンバー各位の皆様方の多大なるご支援とご協力があったからこそ、と本紙面をお借りし心より感謝申し上げます。さて、次回は何年後、どの様にするか、新聞市場が変化してゆく中で、新聞製作技術や製品群も変貌を余儀なくされます。この様な状況下において、「先を読む」事は容易では有りませんが、我々新聞業界に身を置く関係者一同、これからも絶え間なく「新聞業界の活性化」に尽力してゆかねばなりません。これから先、ますます課題も多くなりますが、是非、次回JANPSの更なる発展へのご支援を御願いし、御礼の気持ちと併せ御報告致します。

JANPS 上流工程見学記

朝日新聞東京本社

製作本部システムセクションマネジャー

矢崎 朋夫

「CMS (Contents Management System) の成熟と展開」今回のJANPSで上流系の展示を見学して、頭に浮かんだのがこのフレーズだった。東芝ソリューション、NEC、富士通、CCI ジャパンといった顔ぶれに加え、CrossDesign、Visual Processing JapanなどからもCMSの出展があった。産経、毎日の2社からも自社導入システムが出展された。

前回すでにCMSが上流系の目玉となり、多くの社がシステムやコンセプトを出展していたが、作る側も使う側も、日本の新聞社が必要としているCMSとはどのようなものか、まだまだ手探りの状態だった。それがこの3年の間でCMSの採用、実用化が始まり、運用で採まれる中で、急速にピントが合ってきたように思える。

紙の新聞と多様な電子メディアへの配信を、手間をかけずスムーズに実現するための総合的なシステムとして、従来の素材管理システムよりさらに密に組版や電子メディア編集システムと絡み合い、あるいは一体化したものが、実用システムとして各社から出展されていた。出稿、編集、直し反映といった作業のワークフローをユーザーが定義、変更できる機能の充実なども目立った。

現時点では小規模社でないと実用は難しそうだが、組版上の記事直しがCMS経由で電子メディアの記事にも即時反映される、組版や電子メディア用の見出しもCMS内で入力、修正する、といった仕組みをもつシステムも目を引いた。

春の情報技術部会全体会議でも見学させてもらった東京機械製作所のデジタル印刷機は、印刷速度は150m/分のままだったが、多機能な折機を装備し、紙幅が違う新聞を瞬時



多くの人でにぎわう上流コーナー

に刷り分けるなど見所のある展示だった。個人的にはデジタル印刷は従来の上流系、下流系の切り分けをまたぎ、一体化するものではないかと考えている。うまく活用することで新聞製作に新たな道を開けるのではと感じた。

従来の新聞製作システムの枠に収まらない出展も増えた。インテックの「モバイル端末利用型新ビジネスモデル」は音波による補整によりGPSが使えない屋内でも正確な位置情報をスマートフォンなどに提供する技術で、広告向けの提案だったが、社内・工場見学や催事での活用なども考えられそうだ。東芝ソリューションの販売管理ソリューションは、新聞社ごとにやり方が違い、スクラッチ開発だった販売管理システムを機能の取捨選択ができる形でパッケージとしたもので、すでに採用社が出ている。このようなシステムの普及が業務の標準化につながっていけばと思う。

今回は産経新聞社のみだった、新聞社の出展も5社に増え、導入事例を担当者から直接聞けるといった点を評価する声を多く聞いた。各社とも準備や説明担当者の配置など結構大変だったとのことだが、次回も多くの出展を期待している。

大学、教育機関からも6ブースの出展があった。最先端の研究成果の熱心な説明を受け、これらの技術が次回、次々回のJANPSで実用化、出展されるかもしれない、と新たな楽しみが増えた。

JANPS 製版工程見学記

産経新聞東京本社 制作局技術部長

松浦 康成

日本におけるCTPの高性能化と高速化も一段落し、CTPセッターの実機展示は1社であった。また、新聞印刷のCTP版ではネガサーマル版が確たる地位を占め、初期開発目標はほぼ満足できたものとなっている。今回のJANPSは前回同様に現像処理のコスト圧縮・環境負荷軽減の製版方式である非・低アルカリ現像方式と完全無処理のCTP版の展示が多く、出展社は富士フィルムグローバルグラフィックシステムズ(FFGS)、コダック、岡本化学工業、コニカミノルタビジネスソリューションズ(コニカ)、三菱製紙、日本アグファ・ゲバルト(アグファ)の6社であった。

FFGSとコダックは機上現像方式の完全無処理版をパネル紹介。この方式の刷版は印刷機上で湿し水とインキの粘着力を利用して現像を行うもので、現像液やガム液を使用しない。この版を新聞印刷で使用する場合①耐刷性能②生産性③低い画像部の視認性、検版性などの問題が指摘されている。しかし、自動現像機がいらず、廃液回収も不要でコストや環境対策面でメリットが大きい。将来的には上記の問題も改善され、新聞印刷における第三世代の新聞CTP版へと進化する可能性を秘めた版材となるのではないかと。今後、技術動向に注目したい。

コニカとアグファはガム洗浄のみの非アルカリ現像方式ケミカルレス版の展示と実演をした。商業印刷専用の版材であるが、ここ数年で新聞印刷に使用されるようになってきた。この版材の利点は現像液を使用せず、専用ガム液で洗浄するため大幅な廃液量とコスト圧縮が見込まれる。

岡本化学工業は低アルカリ現像(pH7~10)を可能としたガム1液処理版DTN-1を前回同様に展示。この版の特徴も既存廃液がおお

よそ1/10となることでのコスト圧縮が見込まれるところにある。

三菱製紙は環境改善として水溶性廃液処理装置を展示。この処理装置は現像液のメーカーに関係なく、この他に輪転機の湿し水などの水溶性廃棄物の処理が可能となっている(廃液の削減が1/10になるとのこと)。この装置の開発により、新聞印刷における廃液の削減体制が整った。



熱心な説明を受ける来場者

この他、各出展メーカーでは、現行のCTP版における現像処理プロセスのロングライフ化を提案するなど、現像処理の負荷軽減に力を注いでいた。

2002年にサーマルタイプの新聞CTP版が導入されてから十年が経過し、普及率が96%程度を占めるようになった。この中で高pHの現像処理液の取り扱いや現像液疲労の管理、アルカリ廃液の排出とその処理にかかるコストと作業負担の課題が残る。

今回のJANPSでは、新聞印刷CTP版の最終形態と考えられる機上現像方式の完全無処理版への道程が垣間見えてきたと言える。しかし、まだ残された課題をクリアする時間を要する感がある。その間を埋める技術として、非アルカリ現像方式ケミカルレス版とガム1液処理版の実現か、それとも一気に機上現像方式の完全無処理版に進むのか、次回のJANPSまで結論が出るものと思われる。

JANPS 下流工程見学記

日本経済新聞社 製作局技術部長

中込 慎一

今年のJANPS2012は3日間と期間が短縮された反面、過去最多の出展コマ数、新聞社5社の参加、大学研究室ブースの展示など凝縮された中にも新たな動きが見られた。その反面、実機展示の減少は否めず、出展メーカー各社には厳しい中にもなお一層の奮起を期待したいところである。

その中で今回、やはり下流系で一番目を引いたのは東京機械製作所のジェットリーダーであろう。近年のオンデマンド印刷ソリューションのコンセプトを解りやすく実機デモで再現し、デジタル印刷と新聞の距離をまた一歩縮めたと言える。高速輪転機を多数抱える日本の新聞印刷事情において、そのまま全てがこの形に置き換わるということはないであろうが、新聞各社間の受託・委託印刷の加速による同時間帯並行印刷の必要性や、小ロット多媒体印刷が多い受注紙などへの対応に向けての一つの答えが具現化されていた。問題は新聞用紙での品質、印刷速度、ランニングコスト、そして印刷物媒体そのものか。現段階では新聞社が納入するというより地方の商業印刷会社が所有した方がベストでは？と考えざるを得ない。次回のJANPSでは更にどのように進化しているか期待したい。

一方、現実には目を戻し、設備の一括更新の採用が厳しい現状において、現場の実務担当者から注目を集めていた実機展示が幾つかあった。

東洋インキは紙面検査装置を段階的に更新できる手法を提案。制御部分を最初に更新すれば現状のセンサーをすぐに更新・オーバーホールしなくても色差型の検知にグレードアップできるようにした。これにより今以上に安定した検出が得られ、基準処理時間の短縮、欠陥履歴の常態化監視などの性能向上も得ら



多くの人を集めた実演デモ

れるとのこと。同じくストラパックの新型カウンタスタッカーでは、従来機と本体寸法で互換性を持たせながらも、主受け板を上下可動式に換え、受け板の移動速度も可変にするなど、従来の厚頁機能は維持しながらタブロイド紙、薄頁ブロード紙への荷姿安定化を機能追加している。いずれも現状の配置・取り付け状態を大幅に変えることなく部分更新でき、機能を向上させたことが注目を集めたのであろう。

その他の展示では4×1輪転機に合せた既存装置・資材のカスタマイズ化や、ランニングコスト・環境に配慮した装置・資材が多く見られた。清水製作の布の両面を使用するブランケットクリーナーや、少ない洗浄液で清掃するウヤマエンジニアリング、ニッカのブレード洗浄装置などが該当する。いくつかの排水処理装置やLED展示も同様。

一方、品質に関してはインキ各社が高濃度・高発色インキを展示。新聞社がインキマイリッジの削減を求めたことのみならず、高精細化、用紙の減斤化を進めた時代の流れが反映されているように感じる。かわりどころとしては、その品質を測定・調整量算出・ネットワークデータ転送をするプロスパークリエイティブの測色機が出てきたことか。

刷版部門でも処理プロセスを省く様々なタイプが出てきていたが、こちらは別の方の報告でご確認願いたい。こうして見るとまだまだやるべき事は十分あるのでは？と振り返えさせられるJANPSであったかも知れない。

第3回 CONPT-TOUR 合同再会パーティーを開催

日本新聞製作技術懇話会 クラブ委員会委員長 村松 哲

JANPS2007で初めて開催された「CONPT-TOUR 再会パーティー」も今回で3回目、JANPSの関連催事として欠かせないイベントになってきました。今回は、JANPSの2日目、11月28日(水)に開催、新聞社・会員社合わせて176名の方に参加いただきました。

受付開始の16時30分を待ちかねたように入場された参加者もあり、開会を待たずして再会を喜ぶ声で会場は溢れんばかり。JANPS閉場次第駆けつけた現役メンバーを待って、開会式の運びとなりました。芝会長の挨拶に続き、第3回(1978年)のツアーに参加された中国新聞社OBの尾形幸雄氏の発声で乾杯、久闊を叙して杯を重ねました。

1976(昭和51)年、ANPA(米国新聞協会)展(その後、1994からNEXPOと改称)の視察で始まったCONPT-TOURは、2005年から、視察の主体をIFRA-EXPOに変えましたが、この時以来、IFRA本部では、CONPTメン



芝 懇話会会長

バー向けのセミナーを開催、技術動向などを分かりやすく紹介してくれています。今回、JANPS2012に合わせて、IFRA主催の“Study Tour - Printing in Japan”一行8名が来日しており、その

皆さんもパーティーにご招待しました。団長のManfred Werfel氏(WAN-IFRA Interim CEO)からは「JANPSを見て、日本の新聞業界にはまだ元気があると感じた」とのスピーチがありました。

参加年ごとに分けられたテーブルでは、思い出話が尽きない様子でしたが、記念撮影の後、第1回に参加されたサカティクス(当時は阪田商会)OBの田中武夫氏に中締めをお願いし、散会しました。

今年まで37回に及ぶツアーと、drupa開催年に行われるミニツアー(2回)を含めた参加者は1,000名以上となり、この皆様に案内状をお送りするのが事務局の大仕事です。ツアー参加後、退職や転社などもあるため、原則としてご自宅にお送りするのですが、不明の方、転居された方などもあり、苦勞しています。お知り合いの方で「連絡が届かなかった」などありましたら、事務局宛ご一報ください。

なお、当日撮影した団体写真は、CONPTクラブルームに掲示するほか、CONPTウェブサイト(<http://www.conpt.jp>)にも登録、ダウンロードしていただけるようにする予定です。もうしばらくお待ちください。



WAN-IFRA
Manfred Werfel氏



再会を喜びあう参加年ごとのテーブルで

JANPS 会場内セミナーを開催

日本新聞製作技術懇話会 クラブ委員会副委員長 平井 泰之

JANPS期間中に開催するCONPTセミナーも今回で6回目となった。3年振りの開催ということで、JANPS活性化の施策を実施した。その一つとして「展示の多様化」をあげ新聞社や大学等の研究機関の出席を促すとともに、会場内にセミナーブースを設けて、CONPTセミナーを実施した。さらに会場内ということで、CONPTセミナー開催時以外の有効活用として出展各社にセミナーブースを開放し、各々自由にセミナーを開催してもらうことにした。

当初はどれだけの申し込みがあるか不安で、CONPTセミナーの回数を増やすことも考えたが、そんな心配も吹っ飛び、応募社多数のためセミナーブースを分割し、全応募社に使用してもらうこととなった。その結果、19社22コマにCONPTセミナーの3コマを含めて25コマのセミナーが会期中に開催された。

各社とも一工夫したテーマで講演し、時間の経過とともに参加者も増え、立ち見の出るセミナーも多くみられる盛況となった。

なかでも産経新聞のセミナーは、大学生にとっての新聞というメディアがどう映っているのかを当の学生に語らせており、非常に興味深いものであった。学習院・国学院両大学



盛況だったCONPTセミナー

の学生達の熱演もあり、今どきの学生事情を若干ではあるが理解できた気分にくれた。

最後に当のCONPTセミナーだが、会場内ということもあり、各々違ったテーマで3回開催された。1日目の「INCQC～世界への挑戦～」では世界最高のカラー品質への挑戦を思い立った経緯とその結果が朝日プリンテックから熱く語られた。2日目の「新聞協会賞・技術部門を受賞して」では朝日新聞と中日新聞という全く違った出自とシステムを持つ両社がモニタープルーフの相互利用という一昔前には考えられなかったことを成し遂げた苦労と充実感が両社からの臨場感として伝わってきた。3日目の「World Publishing Expo視察報告」ではIFRAから拡大された展示会状況や欧州の新聞事情が語られ、今のJANPSとの対比でも面白かった。計3回のセミナーに176名が参加され、こちらも盛況であった。

ともあれ、従来とは違った試みには不安もあったが、蓋を開ければ杞憂に終わり、是非とも続けたいと思わせるものとなった。

終わりに、CONPTセミナーの講師の皆様、出展社セミナーの講師の皆様、運営をご支援いただいた多くの関係者の皆様に感謝いたします。



大学生によるパネルディスカッション(産経新聞セミナー)

技術と品質で社会に貢献

弊社は、産業用電機制御総合メーカーです。

新聞業界との関わりは、1972年に開発した新聞発送用宛名紙印刷機制御装置から始まり、すでに40年になります。新聞製作工程に関係する製品(インキブリセットシステム、部数管理システム、宛名印刷システム、個数管理システムなど)を、現場のご要望を聞きながら数多くの新聞社にご提供してまいりました。

また、商業印刷業界においても同様の歴史があり、今日までに枚葉印刷機、フォーム印刷機の制御関係のハードウェア、ソフトウェアを提供しています。最近では、次世代オンデマンドデジタル印刷機の搬送制御、印刷データ処理に取り組み、弊社の技術が印刷機に

組み込まれています。近い将来、オンデマンドデジタル印刷機が新聞製作の一部で採用の可能性もあると聞き及んでいます。すでに諸外国(特に欧州)では新聞の少数印刷に実運用され、今までにはなかった個人向け新聞が印刷されています。

弊社では、新聞業界と商業印刷業界での経験とノウハウを融合して、新しい技術開発、新製品のご提案を積極的に行い、印刷業界の発展に向け努力してまいります。

これからも技術と品質によりいっそうの磨きをかけて参りますので、かわらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



東洋電機株式会社

西研85型輪転機“HAYABUSA”

をJANPS2012で発表

西研85型輪転機は国内外の新聞社で多くの稼働実績を誇る「4×1」輪転機西研65型をベースにグレードアップした最高印刷速度16万部/時の省資源輪転機です。

高速性と先進性を象徴して“HAYABUSA”(はやぶさ)と愛称をつけました。軽量小型で自動化、省人化に対応した新時代の85型機は、高品位かつ高能率でランニングコスト低減にも優れているため、近年の輪転機導入計画で最も関心の高いオフセット輪転機となっています。

また、西研35型IR輪転機も発表しました。半裁豆胴「2×1」機で高性能・低価格を目指して開発しました。主要機械部品は西研の技術指導の元、海外で製作、コストダウンを実現

し、駆動モーター・電装品は日本製で制御システムは西研で構築開発した確かな信頼性を持たせた小型オフセット輪転機で、少数数の地方印刷工場等の設備更新に柔軟に対応できる輪転機です。

さらに新聞搬送機器で国内最大の納入実績を持つCSGキャリア(MARKⅢ)に、より安定した搬送と発送の自動化・合理化に貢献する、EHS(バッチ式損紙処理装置)とグリッパークリーナーを発表しました。

弊社は創業以来「技術立社」を合言葉に常にユーザーニーズを製品に反映させながら、よりスピーディに、より確実に、よりハイクオリティに変革の時代に挑んできました。これからも新聞業界のさらなる発展のために、より良い製品の開発に挑戦し続けます。今後とも変わらぬ御愛顧を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



西研グラフィックス(株)

「NSG+」

日本システム技術株式会社からインテックになって、もう少しで2年が経過しようとしています。

旧日本システム技術の略称「NSG」が事業部の名称として残っている通り、事業・人員はそのままインテックNSG事業部に引き継がれております。

さらに、今までNSGが提供して参りました「PS-GATEWAY5」、「Z-Proofer II」、「EcoProof」、「PDFチェッカー」、「広告管理システム」等のパッケージ／システムはもちろんの事、インテック所有のデータセンターをベースとした日本初の広域仮想クラウドサービス群「EINS WAVE」、国産統合ログ管理「快速サーチャー ログレビ」、そして、先日行われたJANPS2012で好評を頂きました「屋

内位置推測技術」を応用したソリューションなど、インテックが持つ様々なサービス・ソリューションもご提供する事ができるようになりました。

特に「屋内位置推測技術」は基礎技術ではありますが、今後様々なメディアを結びつける新たな手段として、新聞社と読者とを繋ぐ事が出来る非常に高いポテンシャルを持つものと信じております。

これらのインテックが持つインフラ・サービスと従来NSGが持っている製品・パッケージとを融合・昇華させ、よりお客様の役に立つシステム・サービス・製品をご提案・ご提供できるよう努めて参ります。

インテックはこれからもお客様の発展に貢献できるよう努めて参りますので、これからも変わらぬご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。



(株)インテック

新聞業界を含め多彩なニッカ製品

11月に開催されました第21回新聞製作技術展JANPS2012に、ご来場頂きました皆様に御礼申し上げます。ニッカ株式会社は東洋インキ株式会社様と『読む 見る つたえる 今新しい新聞技術』の統一テーマの下、共同ブースを設けました。今回は新しい新聞製作の周辺装置として、従来のブランケット洗浄装置ABS-ENや洗浄廃液再生装置と合わせて、インキドクタ洗浄装置を展示実演しました。本装置は当社の従来からの技術であるインキドクタ上澄み廃液の吸引技術と合わせて、オペレーターの時間と労力を低減し、ウエスなど副資材の削減につながる、接触式の新たな洗浄装置となります。展示会場では実際の洗浄動作を特殊ブラシの回転移動動作として、沢山の皆様にご覧頂きました。

一方JANPS開催の東京ビッグサイト東6ホールの対面となる東1ホールで開催された国際粉体工業展東京2012では、ニッカ株式会社の違う側面を紹介致しました。ブースにはコロナ放電を利用して粉体の均一散布を図るスプレー装置、磁界の乱れを利用して粉体中の金属異物を排出する金属検出機、遠心力を利用した非接触の液体均一塗布装置など、新聞製作の場とは違うニッカ製品をご覧頂けたものと思います。特設スペースの「粉の広場」では、当社の創業時からの基幹製品であるニッカリコを合わせて展示致しました。

当社は1月30日から東京ビッグサイトで開催される機能性材料・フィルム、加工技術の総合展示会ConverttechJAPAN2013に出展します。新聞製作の場とは違うニッカ製品を是非覗いて見てください。



ニッカ株式会社

歳万事楽

もうひとつの基地の町

静岡新聞社 印刷局長

増田 晴樹



航空自衛隊静浜基地。私が生まれた静岡県焼津市上小杉(旧志太郡大井川町上小杉)の田園地帯の真ん中に東西2km、南北500mに渡って滑走路が延びている。飛行場を

持つ航空自衛隊の基地の中では、最小の大きさだそうだが、物心ついたばかりの私にはずいぶん広大なものに感じられた。我が家は、この静浜基地の北側100m、東西の丁度真ん中にあった。我が家の南側に、水田を挟んで広大な基地が横たわっていたのである。

大井川町の大井川は、あの有名な「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と詠われた大井川のことで、町は大井川の河口の西岸に広がる志太平野に開けた典型的水田地帯の中にある。

静浜基地は、第二次世界大戦の終戦間近い1944年12月に日本海軍航空隊藤枝基地として開設されたが、終戦後は米軍に接收され1958年に航空自衛隊静浜基地として再び開設された。基地では、飛行教育団が部隊配置され、教育用の機体として現在では、T7型の単発プロペラ機を備えている。将来的にF-15イーグルなどのジェット戦闘機を駆るイーグルドライバーを夢見る教習生は、まずこの単発プロペラ機で大空への第一歩を踏み出すのである。

最近ではなくなったが、日本の航空会社が誕生したばかりで、十分なパイロットの養成設備を備えていなかった時代には、航空会社の委託を受けて民間パイロットの養成も行っていた。

毎年11月に実施される開港記念の航空祭には、浜松北基地からこの卒業生が駆るT-4ブルーインパルスが上空を舞い祭りの主役として花を添える。航空祭では、滑走路が短いのでT-4は、降りられず展示できないが、C-1輸送機やT7型訓練機、CH-47J双発ヘリなどが展示され県内外から多数の見物客で賑わう。1年に1日だけ基地の周りは、人と車でごった返し、普段はT7型訓練機の爆音だけが時折遠くに響くだけののどかな田園もこの日ばかりは都会の喧騒が持ち込まれたかのような別世界となる。基地に接していた我が家もこの騒ぎに巻き込まれるので、この日は外に出ないで見物客と一緒にブルーインパルスのアクロバット飛行を楽しむか早朝に家を抜け出して夕方まで避難行動を継続するかの二者択一になる。

基地が東西に長く横たわっているため南北に走る国道は、基地のある辺りだけ海岸線を外れ内陸側に基地を迂回して走る。もうひとつの幹線である県道は、戦前の昔から海岸線を走っている。基地の東西の中間に位置する我が家は、2本の幹線道路から遠く離れ、田んぼの中にぽつんと佇んで建っている。その情景は、空き家になった今でも変わらない。交通、買い物など近代的な利便さと言う意味では陸の孤島のままで、それは基地があるがために他ならない。

1980年を過ぎた頃、基地周辺の住民に防音工事の話があった。希望する住民には、世帯人数に応じて1世帯当たり1〜3部屋防音工事を実施する。建具を遮音性のものに替え、壁と天井に防音材を敷き詰め、締め切った部屋のために空調機を設置すると言うものである。何で今頃とも思ったが、我が家も応募し工事を実施してもらった。備え付けられた建具のメーカーは、当時の防衛庁のOBが関係し、エアコンの値段は、市中の販売店よりもかなり高かった。これ以外は、基地があるからと言って町に特段お金が落とされると言うこと

もなかったし、広い道路が建設されることもなかった。反面、米軍基地問題のような深刻さとは無縁である。

戦後67年間平和憲法と米国の核の傘の下であまりに平和裏に過ごしてきた日本。終戦の混乱の中で不当占拠された北方領土はロシアに実効支配されたままだし、最近の韓国、中国の理不尽な領有権の主張は優しい日本人には到底理解できない。そんな深刻な外交と防衛の議論は何処吹く風の如く、静浜基地は今日ものどかな田園風景の中に横たわっている。

趣味発見

パナソニック SS インフラシステム株式会社
メディアグループ グループマネージャー

永瀬 高幸

景気の低迷が長期に亘り続いているせい、最近の我が家の話題は老後にまつわるものが多い。特に共通の趣味の少ない私たち夫婦にとって、「老後に二人で楽しめる趣味を見つけない」と話すことが多くなった。

そんなある秋の日、紅葉狩りがてら鎌倉の街を散策しようと夫婦で出掛けることにした。車の渋滞を避け(本当はお酒が飲みたいという理由から)、JR横須賀線鎌倉駅で江ノ電に乗り換え、極楽寺駅で下車し、極楽寺～成就院～由比ヶ浜～長谷寺～高德院を巡り、江ノ電長谷駅から帰路に着くというコースに決めた。

朝早いせいか横須賀線内には鎌倉散策を目指す乗客がチラホラ見られたものの、混雑もなく極楽寺駅に到着した。桜橋という古い赤い橋を渡り左手に見える茅葺の山門をくぐると極楽寺だ。この季節は人もまばらでひっそりと静まり返った素朴かつ質素な印象を受ける由緒ある古いお寺さんだが、春の桜の季節は大変な賑わいらしい。極楽寺を出て桜橋を戻り、極楽寺坂を進むと紫陽花で有名な成就

院に辿りつく。残念ながらこの季節は紫陽花を堪能することはできないが、山門から南を向くと由比ヶ浜を一望でき、季節を問わず素晴らしい景色に出会える。この日は穏やかな秋晴れで遠くまで由比ヶ浜を見渡すことができ、遅めの朝食は由比ヶ浜で摂ろうと心に決めた。

極楽寺坂を下り、星の井通りから坂ノ下を望むと一面に由比ヶ浜が広がった。優しい秋の日差しの下、ジョギングするランナーを横目に海を眺めながらおにぎりを頬張った。何の変哲もないコンビニのおにぎりだったが、美味しく感じるものだ(まだお酒は飲んでいない)。

海を右手に国道134号線を進み、小路を折れて北上し次の目的地の長谷寺を目指したものの、すでに日は高く、江ノ電長谷駅からの通りは車と人でごった返していた。数メートル歩くのもままならない中、ウィンドウショッピングを楽しみながら長谷観音前を左に曲がると紫陽花の季節ほどではないが長谷寺も大変な喧騒に包まれていた。ようやく境内に辿りつき、境内の美しい花々(と妻)を写真に収め、観音堂内で『万灯祈願会(大晦日の深夜から元旦にかけてカップ型ローソクに火を灯す祈願法要)』の受付を済ませ長谷寺を後にした。

最後に目指すのは大仏で有名な高德院だ。通りは先ほどと同様に混雑していたが注意深く観察していると外国人観光客が多いことに気が付いた。オバマ米大統領が子供のころに高德院で食べたと言われる抹茶アイスが目当てなのか知る由もないがアメリカ人に限らず、中国人、韓国人が特に目立った。

そんな高德院で夫婦二人が楽しめるだろう趣味を見つけた。それはご朱印所と書かれた小窓を今時の若い女性が開けたのがきっかけだった。これまでご朱印は、信仰の厚いなど特別な人がもらう特別な印だと思っていた。元々は寺社に写経を納めた際の受付印であっ

たとされているそうだからそのとおりなのだろうが、高德院の売店で聞くと寺社を巡る楽しみの一つとして「ご朱印集め」があり、朱印帳が売られていると聞いた。早速売店で朱印帳を買い求め、先ほどの若い女性に倣いご朱印所の小窓を開けた。中の様子に一瞬ひるんだもののご朱印の願いを申し出ると5分後に取りに来るよう番号札を渡された。

いただいたご朱印は見事な書だった。こうして二人はご朱印集めのビギナーになり、高德院前の蕎麦屋でどんどこ参拝に行こうかと二人であれこれと話しながら昼食(やとお酒を飲めた)を摂って帰路に着いた。

和やかにIFRA STUDYツアー 歓迎夕食会

来日し帝国ホテルに旅装を解いたIFRA STUDYツアー一行8人を招き、11月24日夕刻日比谷公園内の松本楼で歓迎夕食会を開いた(写真)。芝則之CONPT会長以下JANPS準備部会のメンバーら10人が応対、お馴染みIFRAのワーフェルCEO代理、オリベ이라部長のほか6人と2時間余りにわたって歓談した。

STUDYツアーは2010年春以来の来日で、JANPS開催に合わせて日本の新聞製作事情を視察するのが目的。参加者はスウェーデンのメーカーToleransのCEOら2人、ノルウェーの印刷会社Polarisの役員、アフリカ・ザンビアの新聞社Post Newspaperの女性幹部ら3



人という顔ぶれ。芝会長が日頃IFRAにお世話になっていると感謝し、一行を歓迎するとの挨拶のあと、ワーフェル氏がお礼の言葉を述べた。佐塚正樹新聞協会編集制作部長が乾杯の発声をし、フランス料理を楽しみながらの会話が弾んだ。ザンビアの3人は日本が初めてといい、すべて機能的に動く日本の社会システムに感心、東京の人口が1,200万もあると聞いて目を丸くしていた。

一行は翌25日に仙台に向かい、東日本大震災の津波跡を訪れた。26日以降は、日本製紙岩沼工場、河北新報本社・印刷工場見学、東京に戻ってJNAPS視察、日経東雲工場、読売木場工場、東京機械かずさテクノセンターを見学した。また28日のCONPTツアー再開パーティーにも出席し日本の業界との交流を深めて、30日までにそれぞれ離日した。

(事務局)

JANPS2012成功を評価

第38回年末全体会議開く

CONPTは事業活動・会計を中間報告し、新年度の事業計画を承認する年末全体会議を12月12日(水)午後プレスセンター内で開いた。会議には五阿弥宏安新聞協会技術委員長(読売新聞東京本社取締役)、佐塚正樹協会編集制作部長、仙石同技術・通信主管を来賓に迎え、会員社28社の35名の方が出席した。

開会の挨拶に立った芝則之会長は「来賓3氏のご指導・ご援助で立派なJANPSができた」と御礼を述べた後、「日毎でみた入場者数は前回を上回り、新聞社関係が約5,000人を数えた。この沈滞ムードの中で3年間の技術の蓄積に期待が大きかった。次の第22回をいつ開催するか、今後お諮りしながら検討していきたい」とし、さらに「厳しい環境が続くが、技術の研鑽に努め新聞界発展のために引き続きご支援をお願いしたい。私も微力ながら頑

張りたい」と締めくくった。

五阿弥委員長もJANPSを評価し「今回新聞5社と大学の若い力が加わって、JANPSはオープン化へ踏み出した」と述べた。話題を転じ「信頼できる。情報が多い—で新聞がトップ」という専門紙のメディア調査を引き合いに、「ここは揺らいでいないのでまだまだ紙の新聞の可能性はある」。自身の札幌支社長時代に地元の大学生が新聞を取るようになった経験談を披露し「新聞は習慣。読者が読みたいテーマがあり、読んでもらえる工夫をすればニーズは広がる」とした。製作分野ではこれからデジタル印刷機や高機能インキも魅力。導入が急がれるとの見解を示した。佐塚部長は、「JANPSで新聞ビジネスが皆様に支えられているのを感じた」と謝意を表しつつ、7年ぶりに技術開発賞が出るのではないかと技術委の選考見通しを語った。

芝会長を議長に選出し報告・議事に入り、評議員会とクラブ、企画、広報の3委員会の中間報告があった。24年度事業、会計中間報告と進み、25年度の事業計画案、「新聞技術情報」廃刊にともなう会則改定案が承認された。

会議の後、場所を移し懇親会を開いた。1時間半にわたって歓談の輪を広げ、藤間副会長の中締めでお開きとなった。(事務局)

CONPT 日誌

- 10月10日(水) IFRA TOUR旅行説明会
(出席13名)
- 10月11日(木)第3回JANPSセミナー部会
(出席3名)
- 10月18日(木)第11回JANPS準備部会
(出席11名)
- 10月28日(日) IFRA TOUR出発
- 11月2日(金) IFRA TOUR帰国
- 11月6日(火)評議員会(出席8名)
- 11月8日(木)クラブ委員会(出席6名)
- 11月13日(火)企画委員会(出席9名)

11月15日(木)広報委員会(出席9名)

11月20日(火)第4回JANPSセミナー部会
(出席5名)

11月27日(火)～11月29日(木)
第21回新聞製作技術展
(JANPS2012)
総入場者数：12,589名

27日(火) JANPS懇親会
(於THE BIG LOUNGE、新聞社65名、会員社110名参加)

28日(水) CONPT-TOUR合同再会パーティー
(於THE BIG LOUNGE、176名参加)

12月12日(水)第38回年末全体会議並びに懇親会
(於日本記者クラブ・宴会場
出席会員社28社35名、来賓3名)

12月18日(火)評議員会並びにJANPS2012
第11回運営委員会(出席9名、
新聞協会2名、科学技術館3名)

会員消息

■担当者変更

* 東和電気工業(株)(12月1日付)

[新] 中山 雅晴氏(大阪支店長)

[旧] 木村 正信氏(営業技術部課長)

新着資料

(国内)

* 日本新聞協会“日本の新聞2012”

“日本新聞年鑑2013”、“新聞社の主要製作
設備一覧2012” “新聞技術”No.221

“N I E ニュース”第67～68号、“新聞広告報”
748～750号“新聞技術” No.221 “NSK経営
リポート” No.14

* 富士フイルムグローバルグラフィックシス
テムズ“FGひろば” Vol.152～153

* 日本IBM“無限大” No.131

* 三菱重工業“三菱重工グラフ” 168～169

(海外)

* WAN-IFRA “IFRA Magazine” 7～12月号

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (42社) 平成25年1月1日現在

社 名	〒番号	所 在 地	連 絡 先
(株)インテック	136-8637	東京都江東区新砂1-3-3	03-5665-5097
NECエンジニアリング(株)	270-1198	千葉県我孫子市日の出1131	04-7185-7722
岡本化学工業(株)	335-0004	埼玉県蕨市中央2-6-4	048-431-4816
(株)加貫ローラ製作所	544-0005	大阪府大阪市生野区中川5-3-13	06-6751-1121
(株)KKS	555-0011	大阪府大阪市西淀川区竹島4-11-54	06-6471-7771
(株)金陽社	141-0032	東京都品川区大崎1-2-2 アートヴィレッジ大崎セントラルタワー6階	03-5745-6221
クォード・テック・インク日本支店	336-0034	埼玉県さいたま市南区内谷3-11-26	048-839-8831
コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)	103-0023	東京都中央区日本橋本町1丁目5番4号 コニカミノルタ日本橋ビル	03-5205-7820
コダック(株)	101-0062	東京都千代田区神田駿河台2-9 KDX御茶ノ水ビル	03-5577-1200
(株)ゴス グラフィック システムズ ジャパン	350-1328	埼玉県狭山市広瀬台2-5-15	04-2954-1141
サカタインクス(株)	112-0004	東京都文京区後楽1-4-25 日教販ビル	03-5689-6666
清水製作(株)	108-0023	東京都港区芝浦3-17-10	03-3451-1261
ストラバック(株)	221-0864	神奈川県横浜市神奈川区菅田町2800	045-475-7229
西研グラフィックス(株)	110-0016	東京都台東区台東4-29-15 上野永谷タウンプラザ213	03-5812-3681
第一工業(株)	335-0002	埼玉県蕨市塚越7-2-8	048-441-3660
DICグラフィックス(株)	103-8233	東京都中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル	03-3278-1247
田中電気(株)	101-0021	東京都千代田区外神田1-15-13	03-3253-2816
椿本興業(株)	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6718-0151
(株)椿本チエイン	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6703-8402
東京インキ(株)	114-0002	東京都北区王子1-12-4 TIC王子ビル	03-5902-7651
(株)東京機械製作所	108-8375	東京都港区芝5-26-24	03-3451-8172
東芝ソリューション(株)	105-6691	東京都港区芝浦1-1-1	03-3457-4410
東洋インキ(株)	104-8378	東京都中央区京橋2-3-13	03-3272-0721
東洋電機(株)	480-0393	愛知県春日井市神屋町字引沢1-39	0568-88-6401
東和電気工業(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6F	03-6222-5005
(株)ニコン	100-8331	東京都千代田区有楽町1丁目12番1号 新有楽町ビル	03-3216-2065
ニッカ(株)	174-8642	東京都板橋区前野町2-14-2	03-3558-7861
日本アイ・ビー・エム(株)	103-0015	東京都中央区日本橋箱崎町19-21	050-3150-0738
日本新聞インキ(株)	108-0075	東京都港区港南1-8-27	03-3450-5811
日本電気(株)	108-8557	東京都港区芝浦2-11-5 五十嵐ビル5F	03-5476-4656
日本ボールドウィン(株)	108-0023	東京都港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階	03-5418-6121
パナソニックSSインフラシステム(株)	224-8539	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地	045-938-1613
(株)日立製作所	140-8573	東京都品川区南大井六丁目27番18号	03-3763-2411
富士フィルムグローバルグラフィックスシステムズ(株)	106-0031	東京都港区西麻布2-26-30富士フィルム西麻布ビル	03-6419-0421
富士通(株)	105-7123	東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター	03-6252-2625
富士薬品工業(株)	176-0012	東京都練馬区豊玉北3-14-10	03-3557-6201
方正(株)	140-0014	東京都品川区大井1-24-5 大井町センタービル	03-5746-2651
ボッシュ・レックスロス(株) サーボシステム事業部	150-0002	東京都渋谷区渋谷3-6-7 ボッシュビル3階	03-5485-7240
三菱重工印刷紙工機械(株)	144-0033	東京都大田区東糞谷4-6-32	03-3744-2951
三菱製紙(株)	130-0026	東京都墨田区両国2-10-14両国シティコア	03-5600-1475
ミューラー・マルチニジャパン(株)	174-0042	東京都板橋区東坂下2-5-14	03-3558-3131
明和ゴム工業(株)	146-0092	東京都大田区下丸子2-27-20	03-3759-4621

CONPT